乳幼児は小さな言語学者であり統計学者でもある*

太田　聡

1．乳幼児はことばの規則性を見破る天才

大人は外国語を何年勉強してもなかなか上手にならないが、幼い子どもは外国語をすぐに獲得できる、といった指摘がよくなされる。その理由は、一言で言えば、「乳幼児はことばの規則性に敏感だからだ」ということになろう。つまり、乳幼児は、ことばをただ片っ端から丸暗記するのではなく、そこに存在するパターンや規則を鋭く見破って、その規則を新たな例にも適用していくのである。そして、だからこそ、いわゆる過剰一般化（overgeneralization）を行い、大人には誤っていると感じられる語や文を生み出す。例えば、英語を獲得する幼児が、go の過去形として goed /goud/ を用いる時期があることが知られているが、これは、その子が /d/{-ed} を付加すれば動詞は過去形になるということに（規則動詞の play – played などの活用から）気づき、その規則を go にも当てはめたからこそ起こるのであり、「誤り」というよりも「規則への気づき」の現れである。日本語を獲得する幼児の場合にも、例えば、親から「〇〇はもう来た？」と聞かれたときに、（まだ〇〇が来ていない場合に、）「きないよ」と答えることがある。例えば「見る」の否定であれば、語幹の「み」に助動詞の「ない」をつけて「見ない」とすればよい。であれば、「きた」の否定形も、「き」に「ない」を付加すればよいとする推察は、あながち間違いとは言えない。

ともあれ、乳幼児にはこのような言語の法則を発見する鋭い力があるので、「子どもは小さい言語学者である」といった比喩表現がよく用いられる（そして、広瀬（2017）のように、書名にも「ちいさい言語学者」が含まれたものがある）。しかしながら、乳幼児はことばの中にある規則性に敏感なだけでなく、どうやら、「どのようなパターン・組み合わせが多数派か、あるいは逆に少数派か」といった統計的なことも把握しているようである。次節では、乳幼児の統計学者的な面について述べることにする。

2．乳幼児は統計処理だってやっている

言語学の基本問題の一つに「語（word）とは何か？」というものがある。そして、その答えの一つとして、「書いたときに両側にスペースがあるもの」というものがある。確かに英語などでは単語と単語の間を離して表記するので、語とは書いた場合に両側にスペースがあるもの、という定義ができるかもしれない。しかし、日本語のように、単語と単語の間を空けながら表記する訳ではない言語も多いので、このスペースに基づく定義が不十分であることは明らかである。さて、言語にとっては、文字・表記というのは二次的なものであり、元来は音声がより基本的である（なぜならば、文字を持たない言語であっても、音声はあるからである）。そして、乳幼児も、（その子が獲得する言語の）文字を覚える前に音声を獲得する。ここで注目すべきは、子どもに話しかける大人は、（書かれた英単語の両側にスペースがあるように、）単語ごとにポーズを置きながら発話するわけではないの

* 本稿は、筆者に与えられた科研費（研究課題／領域番号19K00663）によってアメリカ言語学会主催の「2023言語学講座（2023 Linguistic Institute）」（会場：マサチューセッツ大学アマースト校）に参加し、言語獲得論がご専門の Kristen Syrett, Athulya Aravind の両先生と議論したり、紹介された文献や動画を読んだり観たりしたことがきっかけで、その昔、我が子が発した何気ない一言に大きな意味が秘められていたことに気づくに至り、ここに自分なりの見解・分析を記すことにしたものである。

に、子どもはちゃんと「どこからどこまでが一つの単語か」ということを把握できるということである。

例えば、a name と an aim や、I scream と ice cream といった対の例では、子音と母音の並びだけ見ると同じ連鎖と言えるが、音節の微妙な切れ目と繋がりの違いがある（アメリカ構造主義音素論の連接（juncture）という概念に関する議論を参照されたい）。また、後者の I scream と ice cream というペアでは、アクセントの配置の違いも区別の手がかりになる。こうした連接やアクセントは超分節的（suprasegmental）要素であるとされるが、このような手がかり以外に、子音と母音の語中での可能な並び・組み合わせがどのようなものかということも、幼児は手がかりにしているようである。

親が我が子に向かって、例えば（英語で）“pretty baby!” と語りかけるとき、pretty と baby の間にポーズを置くわけではない。それなのに、なぜ乳幼児は pretty baby が2語から成ると判断できるのであろうか。大人で、言語学の知識が多少ある人であれば、pretty baby は、pretty girl, pretty cat, pretty dog, cute baby, beautiful baby, bad baby, etc. といった具合に、先行する形容詞 pretty と後続する名詞の baby のそれぞれを、パラディグマティックな関係（paradigmatic relation）にある語と置き換えて新たな名詞句を生み出せることから、pretty と baby が2つの独立した語であると判定できる、といった論法を思いつくであろう。が、乳幼児がそのような置き換えを一々行うことで判断しているとは思えない。

Netflix で配信されたドキュメンタリー番組に *First Words* というものがあり、その中で、心理学者の Jenny Saffran 教授（ウィスコンシン大学マディソン校）は、pretty baby の場合、（/prɪ/ と /ti/、/beɪ/ と /bi/ という音（節）の連続は英語の語中で起こりうるものだが、）/ti/ と /beɪ/ という連続は語中ではほとんど生じない組み合わせである、という統計的なことを乳幼児は把握しているに違いないと推察している。そして、シンセサイザーの音で（意味のない）人工語を作り、それをまだ自分では語を発することができない赤ちゃんに聞かせる実験を行った。すると、赤ちゃんは、「頻繁な音の連続を含む人工語」と「それらを含まないデタラメな語（non-word）」をちゃんと聞き分け、異なる反応を見せた。人工言語をほんの1, 2分聞かせただけでも、赤ちゃんは頻繁に聞こえる音の組み合わせを察知して、そうではないものと区別できたのである――つまり、（人工）言語を学んだのである[1]。よって、乳幼児は、語を発話する前から、自分が接して（獲得しようとして）いる言語の〈語〉において、どのような音の連続が頻繁に現れて、どのような音の連続は（めったに）現れないのか、といった統計学的な認識をすでに行っていると言えるのである。

このように、乳幼児が、自分が獲得しようとしている言語において、どのようなパターンが多数派で、どのようなパターンは少数派（もしくはあり得ないもの）であるのかといった、データ処理を行っているという指摘は実に興味深い。そして、この Saffran 氏による推察と実験の様子を見た私は、もう34年も前のことになるが、愚息が発した何気ない一言の中に、乳幼児の統計処理能力の素晴らしさが窺えることを思い出した。次節で、そのことを紹介することにする。

3．花の名前の分類および花の名前に対する幼児の反応が教えてくれること

息子がちょうど2歳になったばかりの頃（生後24ヶ月目）のある日、妻が息子を連れて散歩に出かけた。その当時住んでいた宿舎の庭には沈丁花（じんちょうげ）の木が植えてあり、早春に芳香を放つ花を多数つけていた。それに気づいた妻が「わー、沈丁花の花が咲いていて、いい香りがする

[1] この実験で頻繁に聞こえる音の連続は、具体的には「パビー（pabee）」と「クー（coo）」で、これらが2分間で45回聞こえていた。

ねー」と独り言のように言うと、それを聞いた息子が「なんで ジンチョーゲわ ジンチョーゲってゆーの？」と母親に質問したそうである（私はそこに居合わせたわけではなかったが、息子からこんな質問をされて困った、という話を妻から聞き知った次第である）。

幼児は、いろいろなことに対して「なんで○○は○○なの？」と質問してくる時期がある。例えば、「イヌ（犬）はどうしてイヌなの？」と聞かれても、答えようがない[2]。しかし、このときの息子の問いは、そういったよくある幼児の質問とは違って、「『ジンチョーゲ』という名前は、花の名前にしては変わっているな」ということに気づいたからである、と私は直観した。もっと言えば、息子は2歳にして、日本語には和語と漢語と外来語の3つの語種（lexical class）がある（さらに、オノマトペ、すなわち擬声語・擬態語をもう一つの語種とすれば、4つに分類される）ことに気づき始めていたと推察できる。と言うのも、和語と漢語と外来語では音節構造や音素配列にかなり違いが現れるので、そのことを幼児であっても感じ取ったのだと思ったからである。ともあれ、以下に代表的な（あくまで、拙宅の庭やよく行く公園にあるとか、実家の庭や池や畑にあったなどの理由で私がすぐに思い浮かべることができたり、インターネット検索で上位に出てきたりした）花の名前を、語種別に挙げて説明することにする（「A（＜B）」という表記は、「A は B に由来する」、「A は B の変化したものである」といった意味で用いる）[3]。なお、国語辞典のカナ表記が例えば「ホオ」、「ユウ」となっていても、発音が「ホー」、「ユー」である場合には、本論では「ホー」、「ユー」と記すことにする。

（1）和語の例（オノマトペを含む）： サクラ（桜）[4]、ヒマワリ（向日葵）、アサガオ（朝顔）、ヒルガオ（昼顔）、ヨルガオ（夜顔）、ナノハナ（菜の花）、ツバキ（椿）、バラ（薔薇）（＜イバラ）、ツツジ（躑躅）、ユリ（百合）（＜風に揺れる様子から「揺すり」と呼ばれ、それが転じて「ユリ」と呼ばれるようになった）、フジ（藤）、アジサイ（紫陽花）（＜あつまる（集まる）＋真藍（さあい））、ウメ（梅）、ハギ（萩）、カタクリ（片栗）、ススキ（芒）（＜「スス」は「ささ（細小）」もしくは「ササ（笹）」の変形で、それに「草」か「茎」を意味する「キ」がついたもの）、ハス（蓮）（＜花の散った後の花托が蜂の巣に似ていることから「ハチス」→「ハッス」→「ハス」となった）、ハマヒルガオ（浜昼顔）、ミツマタ（三叉）、ウツギ（卯木）、コデマリ（小手毬）、オオデマリ（大手毬）、ヤマブキ（山吹）、サルスベリ（百日紅／猿滑）、ナデシコ（撫子）、ワスレナグサ（忘れな草）、スミレ（菫）（＜花の形が墨入れ（＝墨壺）に似ているので、「すみいれ」の「い」が省略されたものという）、クチナシ（梔子）（＜名は、

[2] 犬は、いったん飼い主に飼われると、どんなに遠いところからでもよく家に帰ってくることから、「帰る」を意味する「往（い）ぬ」が「イヌ」の語源になったという説など、様々な説があるが、はっきりとしたことはわかっていない。

[3] 以下では、花壇（やプランター）に植えるような草花の名前だけでなく、山野草、水性植物、野菜、サボテンなどの名前も、そしてもちろん木に咲く花の名前（つまりは、木そのものの名前）も挙げる。庭木や街路樹・公園木としては知られていても、どのような花が咲くかはあまり知られていない木もあろう。また、野菜としては誰もが知っていても、その花までは知られていないかもしれない。しかし、私にとってはたまたま身近にあるので（あったので）、その木や野菜に咲く花のことを知っている・思い浮かべることができる場合には、以下にその名称を挙げた。その意味では、以下のリストはかなり主観的判断・個人的経験によっている面がある。

[4] 現在「サクラ」と言えば「ソメイヨシノ」を指すことが多い。また、「サクラ」とつくものには、例えば、「ヤマザクラ」、「オオヤマザクラ」、「カスミザクラ」、「オオシマザクラ」、「カンヒザクラ」、「カワヅザクラ」、「マメザクラ」、「ヤエザクラ」、「シダレザクラ」など様々な種類があるが、本論ではこれらを全部まとめて「サクラ」とすることにする。また、「バラ」も種類・品種が実に多いが、個別の名前は挙げずに、全部まとめて「バラ」とする。「ユリ」も「ヤマユリ」、「カノコユリ」、「ササユリ」、「ヒメユリ」、「スカシユリ」「テッポウユリ」など多くの園芸品種があるが、まとめて「ユリ」とする。

果実が熟しても口を開かないことことによる)、アザミ（薊）（＜名前の由来は、アザム（＝傷つける、驚きあきれる）がもとで、花を折ろうとするととげに刺されて驚くからいう説がある)、サツキ（皐月)、タチアオイ（立葵)、ツユクサ（露草)、ナズナ（薺）（＜「撫菜（なでな)」（＝撫でたいほどかわいい菜）より転化したと言われる)、ナナカマド（七竈）（＜「木が燃えにくく、七度カマドにくべても灰にならない」という意味であると言われる)、ハナミズキ（花水木)、ハマナス（浜茄子･浜梨)（＜「ハマナシ」の東北訛りとする説と、文字通り「浜辺のナス」の意味とする説がある)、ヒイラギ（柊）（＜トゲに触れるとヒリヒリ痛むことから、「ひりひり痛む」という意味の古語「ひひらく（疼く)」に由来する)、ベニバナ（紅花)、ホトトギス（杜鵑草）（＜鳥のホトトギスに模様が似ていることから。なお、鳥の「ホトトギス」はその鳴き声に由来する)、マツヨイグサ（待宵草)、モモ（桃)、ユキノシタ（雪の下)、ユキヤナギ（雪柳)、アヤメ（菖蒲）（＜花びらに編み目の模様があったことから、文目（あやめ）と呼ばれるようになったと言われる)、エビネ（海老根)、シロツメクサ（白詰草)、カキツバタ（杜若）（＜古くは花汁で布を染め、「書きつけ花」と呼ばれていたという)、シモツケ（下野）（＜下野の国で発見されたことにちなむ)、アセビ（馬酔木）（＜葉は有毒で、馬や鹿が食べると麻痺して足がなえたようになることから「足痺（あししび（れ))」と呼ばれ、それが訛って「アセビ」となったという)、ツワブキ（石蕗）（＜葉っぱがフキ（蕗）に似ており、その表面は光沢があることから、「ツヤのあるフキ」→「ツヤブキ」が転じて「ツワブキ」となったと言われる)、アイ（藍)、カラタチ（枳殻）（＜「からたちばな（唐橘)」の略)、セリ（芹)、ミズヒキ（水引)、ウメモドキ（梅擬)、ケヤキ（欅)、サカキ（榊)、ガマズミ（莢蒾）（＜枝は折れにくいので鎌（かま）などの道具類の柄とする。ガマは鎌で、ズミは酸っぱい実の意味という)、カタバミ（酢漿草）（＜名前の由来は、夜になると葉を閉じることから、「片喰」、すなわち半分食べられたようだと言われたからという)、アカネ（茜)、アケビ（木通）（＜実が熟すと縦に割れて口を開くことから「開け実（あけみ)」が転化したという説などがある)、エゴノキ（野茉莉）（＜名前は、果実を口に入れると喉や舌を刺激してえぐい（えごい）ことに由来する)、オキナグサ（翁草)、オシロイバナ（白粉花)、オミナエシ（女郎花）（＜「おみな」は女性を指し、「えし」は古語の「へし（圧し)」で、美女を圧倒する美しさから名づけられたという説などがある)、キリ（桐)、クリ（栗)、スイカズラ（忍冬）（和名は「吸い葛」の意で、花筒の下部から蜜を出し、吸うと甘い)、スモモ（李)、トリカブト（鳥兜)、ナツツバキ（夏椿)、ネジバナ（捩花)、ネムノキ（合歓木）（＜夜になると葉を閉じることから、「眠りの木」が転化してネムノキになったと言われる)、ハコベ（蘩蔞）（＜語源は、「葉配り（はくばり)」の転とする説など諸説あるが、よくわかっていない)、ハナニラ（花韮)、コブシ（辛夷)、ホタルブクロ（蛍袋)、ミセバヤ（見せばや）（＜この花を見つけた法師が、冷泉為久に「君に見せばや（見せたいものだ)」と文を添えて贈ったことに由来すると言われる)、ミソハギ（禊萩）（＜萩に似て、禊（みそぎ）に使うことに由来)、ヤツデ（八手)、ヤナギ（柳)、ユズ（柚)、オダマキ（苧環)、トチノキ（栃の木)、タラノキ（楤の木)、ヒトリシズカ（一人静)、ミヤコグサ（都草)、イネ（稲)、エノコログサ（狗尾草）（＜「いぬころ草」、すなわち穂の形が子犬の尻尾に似ていることからいう)、ヘチマ（糸瓜）（＜果実を乾燥させると糸状になるので元は「イトウリ」と呼ばれたが、それが「トウリ」となり、「と」は『いろは歌』で「へ」と「ち」の間にあるから「ヘチマ」となったという説がある)、イチゴ（苺)、ネギ（葱)、ツゲ（黄楊）（＜木目が丈夫なため「強木目木（つよきめぎ)」とされ、それが転化した

とする説などがある)、クズ（葛)、ヨモギ（蓬)、カナメモチ（要黐)、フキ（蕗)（＜冬に黄色い花が咲くことから、「フユキ（冬黄)」の中略で「フキ」になったとする説などがある)、ツメクサ（爪草)、オモト（万年青)（＜株が大きいことから、大本（おおもと）の意と言われる)、シバザクラ（芝桜)[5]、ホーズキ（鬼灯)（＜赤く膨らんだ実の姿が頬に似ていることから、「頬つき」からとする説などがある)、ユーガオ（夕顔)、ユースゲ（夕菅)、ハマユー（浜木綿)(＜ハマユフ)、オーイヌノフグリ（大犬の陰嚢)(＜「フグリ」はおそらく「ふくろ（袋、嚢)」のことであろう)、オーバコ（大葉子)、カキドーシ（垣通)、メボーキ、(目箒)、ヒオーギ（檜扇)、タンポポ（蒲公英)（＜タンポポの茎を鼓のような形に反り返らせる子どもの遊びがあり、江戸時代にはタンポポを「ツヅミグサ（鼓草)」と呼んだことから、タンポポの語源は、鼓を叩く音を形容した「タン」「ポポ」という擬音語とする説が通説となっている）など

（2）漢語の例[6]：　ジンチョーゲ（沈丁花)、キンモクセー(金木犀)、ギンモクセー(銀木犀)、スイレン（睡蓮)、シャクナゲ（石南花)、レンゲソー(蓮華草)、リンドー(竜胆)（＜「竜胆」の音読みが変化した語)、キキョー（桔梗)（＜薬草としての漢名「桔梗」を音読みした「キチコウ(キチカウ)」が変化した語)、シャクヤク（芍薬)、スイセン（水仙)、ボタン（牡丹)、フヨー(芙蓉)、カイドー(海棠)、ケートー(鶏頭)、ホーセンカ（鳳仙花)、キョーチクトー(夾竹桃)、コチョーラン（胡蝶蘭)、キンギョソー(金魚草)、サザンカ（山茶花)（＜「サンザカ」の音位転換)、サンザシ（山査子)、タイサンボク（泰山木)、ナンテン（南天)、センリョー（千両)、マンリョー（万両)、フクジュソー（福寿草)、マンサク（満作)、モクレン（木蓮)、ローバイ(蝋梅)、ヒャクニチソー(百日草)、サンザシ（山査子)、オーバイ（黄梅)、キンセンカ（金盞花)、センニチコー(千日紅)、サンショー(山椒)、イチョー(銀杏)（＜イチョウは、葉がカモの水掻きに似ていることから、中国では「鴨脚」と言い、「イチャオ」「ヤーチャウ」などと発音された。これが日本に入り、「イーチャウ」を経て「イチョウ」になった)、ギボーシ（擬宝珠)（＜「ぎぼうしゅ」の転)、ゲッカビジン（月下美人)、ゲッケージュ（月桂樹)、シューカイドー(秋海棠)、ブドー(葡萄)、ボダイジュ(菩提樹)、マンサク（万作)、リンゴ（林檎)、レンギョー（連翹)、アンズ（杏子)、シオン（紫苑)、キンシバイ（金糸梅)、ミョーガ（茗荷)（＜中国名漢字の「蘘荷（めが)」が、呉音で「ニャウガ」と発音されていたため、「ニャウガ」が「ミャウガ」となり、「ミョウガ」になったと考えられるという説がある)、ケマンソー（華鬘草)、ダイコン（大根)、ゲットー(月桃)、シューメーギク（秋明菊）など

（3）外来語の例：　チューリップ、カーネーション、サルビア、ペチュニア、ベゴニア、グロキシニア、フリージア、フクシア、ストケシア、ダリア、セントポーリア、ロベリア、アカシア、ポインセチア、シネラリア、アルメリア、カルミア、ストレリチア、ルドベキア、ペラルゴニウム、ゼラニウム、デルフィニウム、シンビジウム、デンドロビウム、ジギタリス、エリカ、ポーチュラカ、プリムラ、ラナンキュラス、ランタナ、リアトリス、ルピナス、スターチス、アロエ、ムスカリ、コスモス、シクラメン、アネモネ、カンナ、クロッカス、アマリリス、ハイビスカス、ミモザ、パンジー、ブーゲンビレア、クレマチス、ヒヤシンス、ラベンダー、スイート・ピー、マリーゴールド、ライラック、マーガレット、デージー、タイム、ミント、ポ

[5] 芝桜は、「桜」とついていても、植物学的には桜とはかなり遠縁で、ハナシノブ科に属する。
[6] いわゆる呉音か漢音か唐音かという違いは問題にせず、音読みするものはどれも「漢語」とした。

ピー、グラジオラス、カトレア、アザレア、ジャスミン、スノーフレーク、クリスマス・ローズ、ブルーベリー、プラタナス、ヘリオトロープ、カモミール、ピラカンサ、レモン、ガーベラ、オリーブ、カラー、アガパンサス、ローズマリー、オクラ[7]、レモン・バーム、アカンサス、クレソン、エーデルワイス、サフラン、カボチャ（＜ポルトガル人によってカンボジアの産物として日本に伝えられたので、カンボジアを意味するポルトガル語が転訛し、カボチャとなったとされる）、エニシダ[8]、カサブランカなど

（4）ハイブリッド（和語＋漢語など）の例：　ハナショーブ（花菖蒲）、ヒガンバナ（彼岸花）、ミズバショー（水芭蕉）、スズラン（鈴蘭）、カスミソー（霞草）、シャコバサボテン（蝦蛄葉サボテン）、ツキミソー（月見草）、ドクダミ（毒だみ）（＜毒や痛みに効くということから、「毒傷み」が転じたものと言われる）、ホテーアオイ（布袋葵）、ホトケノザ（仏の座）、ヤグルマソー（矢車草）、ナンキンハゼ（南京黄櫨）[9]、イカリソー（錨草）、イチハツ（一初）、オジギソー（御辞儀草）[10]、カリン（花梨）[11]、サクラソー（桜草）、ドーダンツツジ（灯台躑躅）、ノーゼンカズラ（凌霄花）、ビジョザクラ（美女桜）、ワレモコー（吾亦紅）、セータカアワダチソー（背高泡立草）、ヤブラン（藪蘭）、ブラシノキ（ブラシの木）、クサキョーチクトー（草夾竹桃）、ムラサキシキブ（紫式部）、ジャノヒゲ（蛇の鬚）、ビヨーヤナギ（未央柳）など

あくまで個人的な印象・感覚であり、植物図鑑などを参照して厳密に、そして徹底的に数え上げたわけではないが、花名（かめい）の語種別の割合で言うと、和語のものが一番多くて、およそ4割を占めると思われる[12]。(1) に挙げたのは代表的なものにすぎないが、もし徹底的に調べて数え上げたとしても、全体に占める割合はほぼ同じになるであろう。そして、その次に多いのは外来語のもので、(3) に挙げたのはほんの一部であるが、これもまた、徹底的に数え上げたとしても割合は大体同じで、およそ3割を占めると思われる。一方、(2) に例示したような漢語の花名は意外と少なくて、その割合は2割程度と思われる。(4) にハイブリッド例を挙げたが、この類の割合はおそらく1割程度であろう。つまり、実例を列挙しながら、和語：外来語：漢語：ハイブリッド語のおおよその割合は4：3：2：1であろうと感じたのだが、試しに（1）～（4）に挙げた例を数え上げて、百分率を出してみた。その結果、総数272例のうち、和語は110例で40.44％、外来語は82例で30.15％、漢語は52例で19.12％、ハイブリッド語は28例で10.29％となり、自分でも驚くほど予想とぴったり一致する数値となった。

ちなみに、「名前で探す花図鑑」というインターネットのページを見ると、アイウエオ順に（草花と木の両方の）名前が列挙されており、和語や漢語の花名は平仮名書きで先に並べられ、外来語の花名は片仮名書きで下に並べられているので、大体の割合を確認するのに好都合である。このページ

[7]「オクラ」は偶然「お蔵」と発音・アクセントが同じなので、和語のようにも聞こえる。

[8]「エニシダ」という呼び名は、ラテン語で小低木を意味する「genista（ゲニスタ）」が元々の語源で、それにスペイン語の「hiniesta（イニエスタ）」、オランダ語の「genista（ヘニスタ）」などが混ざって音が変化したと言われている。なお、「エニシダ」となっているが、シダ植物ではない。

[9]「ハゼノキ（黄櫨）」は秋に紅葉し、それが埴輪の色に似ているので、埴輪を作る工人である土師（ハニシ）が黄櫨の古名となり、それが「ハジ」と短くなり、さらに「ハゼ」と変化したと言われる。少なくとも（語源となった）「ハニ」という部分は漢語ではないので、ここでは「ナンキンハゼ」を、漢語ではなく、ハイブリッド例とした。

[10]「辞儀草」という部分は音読みだが、「御（お）」が和語的なので、ハイブリッド例とした。

[11]「梨」を「リン」と読むのは（音読みではなく）人名訓なので、ハイブリッド例とする。

[12] 本稿では、「花名」を「花の名前」の意味で用いる。

において平仮名で挙げられたものをよく見ると、例えば、「あお（青）～」、「おお（大）～」、「こ（小）～」、「さわ（沢）～」、「しろ（白）～」、「の（野）～」、「はな（花）～」、「はま（浜）～」、「ひめ（姫）～」、「やま（山）～」などが目立つ。つまり、色や大きさや生育場所などを表す接頭辞的な要素がついているわけであるが、こうした要素のついた例を含めていけば（例えば、「イワカガミ（岩鏡）」だけでなく、「オーイワカガミ（大岩鏡）」と「コイワカガミ（小岩鏡）」も数えるというやり方をすれば）、和語の割合はさらに多くなるであろう。

さて、ここで注目していただきたいことは、和語の花名の場合、そのほとんどの例において、一つの子音と一つの母音を組み合わせた CV（C は consonant、V は vowel の略）という単純な音節構造の連続で語が形成されているということである（（1）に示した例では、ホーズキ、ユーガオ、ユースゲ、ハマユー、オーイヌノフグリ、オーバコ、カキドーシ、メボーキ、ヒオーギ、タンポポにおいてのみ、長音や撥音が含まれている）[13]。一方、漢語の花名の場合には、どれも、撥音（/N/ で表す。例えば「ジン /ziN/」）、長音（/R/ で表す。例えば「セー/seR/」）、二重母音（第二要素を /J/ で表す。例えば「スイ /suJ/」）、拗音（C と V の間に /y/ を加えて表す。例えば「シャ/sya/」）、あるいは拗音と長音が合わさったもの（例えば「チョー/tyoR/」）が含まれていることが特徴である。すなわち、単純な CV だけでなく、CVN, CVR, CVJ, CyV, CyVR といった複雑な構造をした音節が含まれており、和語の場合とは明らかに印象が異なる[14]。そして、外来語の花名の場合には、-lip, -ation, -via, -nia, -sia, -lia, -cia, -tia, -ria, -mia, -tzia, -ckia, -nium, -dium, -bium といった語末部分（または最終音節）が外来語らしさを感じさせる[15]。母音の連続を通常は回避するのが日本語の特徴なので、/ia/, /iu/ と母音が連続した例は異質な印象を与えることになろう[16]。また、digitalis, erica, portulaca, primula, ranunculus,

[13] 擬態語・擬声語が多いことが日本語の特徴であるので、本論ではオノマトペの例を和語のグループに入れたが、厳密に言えば、和語と擬態語・擬声語は異なる音韻的振る舞いをするので、別の語種とすることができる（例えば、Ito & Mester（1995）を参照）。

[14] なお、「菊」は「キク」という音読みしかないので漢語と言えるが、例外的に CVCV という音節構造をしているので、和語と勘違いをしてしまう。「イチイ」も V-CV-V という和語的な音節構造をしているが、漢字では「一位」で、音読みされるので、漢語とすべきであろう。漢字の音読みということで判断すれば、「シソ（紫蘇）」も（和語的な響きであるが）漢語であろう。「ボケ（木瓜）」も、「モケ」や「ボックワ」からの転化とされるので、おそらく漢語であろうが、CVCV に変化している。また、「ムクゲ（木槿）」は「モクキン、モッキン」のはずだが、訛って CVCVCV の「ムクゲ」になったと思われる。「枇杷（ビワ）」という名前は、音読みという意味では漢語例であるが、実が楽器の琵琶に似ていることに由来し、琵琶の「琵 pi」はバチを外側に弾く動作、「琶 pa」は内側に弾く動作を表すとのことである。よって、「ビワ」は一種のオノマトペかもしれない。「ザクロ（石榴）」も、漢名「石榴」の呉音「ジャクル」が日本で訛ったという説に従えば、漢語と言えるかもしれないが、原産地がイランの西方にあるザグロス山脈辺りで、この「ザグロス」が元になったという説もあり、よくわからない。なお、ここで触れた例をそれぞれ（2）の漢語や（1）の和語や（3）の外来語のところに加えたとしても、1％前後の変動しかないので、本論の議論に影響を及ぼすものではない。

[15]「チューリップ（tulip）」の語源はトルコ語の tulipan（ターバン）で、花の形がターバンに似ているからと言われる。しかし、例えば lip, clip, flip, slip, Philip, grip, trip, strip, drip のように -lip や -rip で終わる英単語がかなりあるので、「チューリップ」という語も英語らしいと感じそうである。「カーネーション（carnation）」の語源は、赤い花の色が肉の色に似ているので、「肉」を表す carn-（cf. ラテン語の caro（肉））に状態を表す接尾辞の -ation が付加されたとのことである。しかし、そういった詳しい語源を知らなくても、日本語の中に「インフォメーション、デコレーション、コンビネーション、リレーション、センセーション」などの（原語の綴りが）-ation で終わる外来語が多くあるので、「カーネーション」も英語からの外来語であると感じるはずである。-ia は、植物名を表す名詞や動物の種類を表す名詞などを作る接尾辞である。しかし、そういった知識はなくても、外国の地名（地域名、国名、州名など）に -ia で終わるものが非常に多いので（例：Arabia, Columbia, Bolivia, Oceania, Rumania, California, Asia, Indonesia, Russia, Bulgaria, Algeria, Australia）、「～ビア」、「～ニア」、「～ジア」、「～シア」、「～リア」などで終わる花名を聞くと、外来語だと感じるはずである。-ium はラテン語系の名詞や化学元素名などを作る接尾辞であるが、特に植物学用語では「小形、塊」の意の語尾

lantana, liatris, lupinus, statice, aloe, muscari, cosmos, cyclamen, anemone, canna, crocus, amaryllis, hibiscus, mimosa, pansy, bougainvillea, clematis, hyacinth, lavender, sweet pea, marigold, lilac, marguerite, daisy, thyme, mint, poppy, gladiolus, cattleya, azalea, jasmine, snowflake, Christmas rose, blueberry, platanus, heliotrope, chamomile, pyracantha, lemon, gerbera, olive, calla, agapanthus, rosemary, okra, lemon balm, acanthus, cresson, Edelweiß, saffraan, Camboja, genista/hiniesta, Casablanca といった語全体――より正確には、原語およびその日本語読みの語――も、いかにも外来語（ラテン語、英語、フランス語、ドイツ語、オランダ語、ポルトガル語、スペイン語など）であると感じさせる。さらに、より専門的に言えば、「～プ（pu）」や「～ス（su）」や「～ク（ku）」といった無声子音が先行する場合の語末の母音 /u/ は、アクセント核がそこになければ無声化するので、実質、子音で終わる閉音節となり、開音節が基本の和語とは異なる響きをもたらす。

例えば、ニモキサ、レンビャクケー、ノイトーバー、ヘトユワリ、ゼンガショーキ、サーパリタスといった臨時語（nonce word）を作って、どれが和語的か漢語的か外来語的かと日本語話者に尋ねれば、多くの人が「ニモキサ」と「ヘトユワリ」が和語的、「レンビャクケー」と「ゼンガショーキ」が漢語的、「ノイトーバー」と「サーパリタス」が外来語的と回答するだろう。こういった暗記によらない直観的なこと（あるいは統計的なこと）が、大人だけでなく、幼児であっても（個人差はかなりあるにしても）ある程度できるものと思われる。もちろん、幼児に「和語」、「漢語」、「外来語」、「音節構造」などの概念が既にあると唱えたいわけではないが、どのようなパターンが多数派（標準的）で、どのようなパターンが少数派（特殊）かといった区別は、幼児でもできるはずである。

4．その他の可能性および結論

私の息子のエピソードおよび私の推察を（あくまで私信（personal communication）としてであったが）Kristen Syrett 氏に伝えたところ、彼女から、以下のようなコメントをいただいた。

> 1, 2歳の子どもに親などが話すときには、下位語である個別の名称よりも、より広く使える上位語を使うことが多いです。例えば、犬のことを言うときには、「ビーグルがいる」とか「ラブラドル・レトリバーがいる」など言わずに、「イヌがいる」と言うでしょう。もっとも、上位の分類語と言っても、「哺乳類」とか「生き物」とかは言いませんが・・・。これと同じように、花のことを言うときも、「ハナ」という語を使うのが普通だと思います。だから、あなたの息子さんは、お母さんが「『ジンチョーゲ』が咲いている」と花の個別名称をわざわざ使ったのはずいぶん特殊なことだと感じて、「どうして『ジンチョーゲ』って言ったの？」と聞いたのではないでしょうか。

確かに、幼児と話しながら歩いているときなどに、犬や猫を見かけると、（よほど特殊な状況・文脈でない限りは、）「ポメラニアンがいるね」とか「スコテッシュ・フォールドがいるね」など言わずに、「ワンワン／ワンちゃん／イヌがいるね」とか「ニャンニャン／ねこちゃん／ネコがいるね」といっ

として用いられる。この接辞の意味や用法を知らなくても、例えば、アルミニウム（aluminium）、ラジウム（radium）、ウラニウム（uranium）などはよく聞く外来語なので、花の場合も、「～ニウム」や「～ジウム」などは外来語だとわかるはずである。

[16] あまり表記（綴り）を意識しなければ、例えば、「シンビジウム」は「シンビジューム」と発音されがちである（つまり、二つの連続する母音を一つにまとめる母音融合（vowel coalescence）が起こり、/iu/ → /ju:/ となる）。

た言い方をするはずである。よって、Syrett氏の指摘は当を得ており、一般的には正しい見解と思われる。

しかしながら、幼児の言語発達はかなり個人差があり、いわゆる語彙爆発が始まる時期もかなり幅があると思われる。私の息子の場合には、1歳半検診のときにすでに「おかーさん、ぼくもーつかれたよ。おうちにかえろー」と言って周りに驚かれていた。また、2歳になったばかりの頃（1989年3月～4月）に、当時の首相の竹下登氏をマスメディアが批判・揶揄した内容をおおよそ理解して、「『タケシタさんわ、ゲンゴメーリョー、イミフメー』なんでしょ」などと言っていた。したがって、2歳の息子は、花のことを「ハナ」としか思っていない、などということは決してなかったと思う。

親である妻も私も、いわば容赦なく、大人に話す場合と同じような言葉づかいを息子にはしていたし、花についても、結構個別的な名前を挙げながら話していた。例えば、辛夷の花を見かけると「コブシの花が咲くと、春っていう感じだね」と話したり、近くのお店で枝垂れ桜が咲いていると「シダレザクラが綺麗だね」と言ったり、「母の日だから、お母さんはおばあちゃんにカーネーションを贈ったよ」と話したり、図鑑にダリアの花が載っていると「崎山のおじいちゃんは花壇にダリアを植えていたよ」と話したり、田んぼの畦に咲く彼岸花を見かけると「この赤い花はヒガンバナって言うんだよ」と教えたり、公園でコスモスを見かけると「お母さんは花の中ではコスモスが一番好きなんだよ」と話したり、クリスマスの頃になると「ポインセチアを買ってきたよ」と言ったり、という具合だった。よって、息子は、たとえ2歳であっても、花の名前を何十通りか知っていたはずである。

したがって、上で触れた息子の「なんで ジンチョーゲわ ジンチョーゲって ゆーの？」という質問は、単にその名前を初めて聞いて珍しいと思ったからではなく、「他のよく聞く花の名前とはパターンが違うな」と感じたからこそ発せられたのであろう。そして、パターンやタイプの類似・相違というのは、既述のように、統計的な処理によって判断されているに違いない、というのが本論の主張である。つまり、花の名前に関しては、和語と外来語のものが7割以上を占めるので、2割あるかないかの漢語例（しかも音節構造が複雑なもの）に接すると、「何かが違う」と幼児であっても感じたはずである[17]。もし、初めて聞いた名前で、まだ知らなかったとか、驚いたということであれば、「ジンチョーゲってなに？」と聞いたはずである。「なに」ではなくて、「なんで」と質問した点に注意されたい。私たちは自覚がなくてもいつもデータ処理を行っている。そして、「私たち」にはもちろん「乳幼児」が含まれる（いやむしろ、乳幼児の方がより盛んにデータ処理を行っていそうである）[18]。

[17] 英語の形容詞の kind は古英語（Old English）由来の語で、その名詞形は kindness だが、同じく1音節の形容詞であっても pure はラテン語由来で、その名詞形は（pureness も可能ではあるが、）purity となる。-ness を使うか -ity を使うかといったことは、特に語源について学んだわけではない子どもでも、英語が母語であれば、なんとなく判断できるはずである。おそらくこういった場合も、統計的な処理によって、音韻的な構造やパターンの違いなどが感じ取られているのではなかろうか。

[18] 息子が生後4ヶ月頃に、その当時かなり中国語を話すことができた妻が、息子に中国語で話しかけたことがあった。すると、息子がキャッキャッと笑って脳みそをピクピクさせ、いつもとは明らかに違う反応を見せた（まだ大泉門が閉じていなかったので、脳が激しく活動しているときには外から動きが見えた）。まるで、「お母さんが、いつもと違う変な話し方をしている」と言わんばかりの反応であった。このことは、乳児は、ことばを喋り始めるはるか前に、自分が獲得しようとしている言語とそうでないものの区別――まさにデータ処理――ができることを示唆している。

参照文献

広瀬友紀 2017.『ちいさい言語学者の冒険：子どもに学ぶことばの秘密』東京：岩波書店.

Itô, Junko and Armin Mester 1995. Japanese Phonology. In John Goldsmith（ed.）, *The Handbook of Phonological Theory*, 817-838. Cambridge, MA: Blackwell.